

独立自営工務店 という選択

小池一三 「町の工務店ネット」代表

第77回

地域施設を木造で!



5mスパンによる先行事例
写真はいずれも細木建築研究所の設計による。

近くの山のムク材を用い、 工務店がやれる仕事に

普及を阻害しているもの

日本は、木の国といわれる。国土の68・57%は、森林によって占められている。しかし、都市部だけでなく林産県においてすら、木で造られた地域施設は、限られた状態に置かれている。

国もそれに気づき、平成22年(2010)年に「公共建築物等木材利用促進法」を打ち出した。しかし、施行から5年も経つのに、遅々として進んでいない。公共建築だけでなく、民間施設も右に倣えである。

日本で、公共建築物が集中的に整備されたのは、1969〜1980年代だった。近代建築はイコール「非木造化」を意味し、鉄とコンクリートが主流の時代だった。

全国どこでも木造住宅が多数を占めているが、地域施設となると、木造は少数である。しかし、少し時代を遡れば、学校は木造校舎だったし、役場も郵便局も木造で建てられていた。片田舎にあるこれらの建築物はペンキで塗装されてい

て、どこかハイカラな空気をさせていた。それらは高度成長以降に姿を消し、鉄とコンクリートの建築に取って代った。

地域の有力な設計事務所が身につけた技術は、鉄骨とRC造だった。木造の架構技術は地域から失われた。何故手が出ないのかを問うと、彼らは用材の発注時の数量確保や一括発注が難しいこと、木造建築物の維持管理手法や費用の算出方法などが確立しておらず、にわか仕込みで「木造化」に取り組んでも、企画・設計、部材生産、流通、施工、維持管理に自信が持てないという。覆水盆に返らずである。

今、俄かにCLTに注目が寄せられている。この重厚長大の技術に対する国の期待は大きく、傾斜が目立つが、現在のところ、対象建築物はモニユメント的な建築物が多く、コスト高と技術難度の高さが問題視されている。

CLTが「成長戦略」の一つとして有望視されるのはいとしとして、中規模建築以下のものについては、地域の工務店や設計事務所が担えるものとして取り上げ

先行事例／カフェレストラン カンフーレ外観

高知市内に現存する木造のカフェ。外壁は土佐漆喰、軒裏は杉野地板見出し、テラス床は石貼。深い庇は建物に奥ゆかしさを与えると共に、素材がいつまでも美しい姿を確保する。



先行事例／カフェレストラン カンフーレ内観
柱梁を見出しにしながら、すっきりした内部空間。白い壁天井はペンキ塗、右側の壁はモザイクタイル、床は石貼。カフェ、レストラン利用の他、ウェディングにも利用されている。

られるべきではないか。

土佐派の建築家との出会い

私は、工務店をネットする仕事を担っているため、各地の仕事を見る機会が多い。そんな中で注目したのは、土佐派の建築家・細木茂（細木建築研究所）の仕事だった。氏の代表作である「オーベルジュ土佐山」に泊まり、高知市内に建てられた、小さなカフェや、診療所などの建築物も見て回った。カフェは郊外に立地するのに若い女性客で賑わっていた。木造だけれどシャープな形態を持ち、居心地がよく、現代感覚にマッチしている。それは長細い「木の箱」というべき建物で、幾つか見学した建物は、用途は異なるものの、このスケルトンを基本にしてカスタマイズされたものだった。裏ワザというか、建築家らしい巧緻なディテールによって条件づけられているものの、基本は単純な「箱」である。明快で率直な表情を持ち、何よりコスト的な有利さを感じた。

地方の商業施設は予算が厳しい。限られた予算と、クライアントの希望との織り成しがこの建物を生んだのだ、と思ひ、私は、「これは使える」という直感を持った。敷地条件や用途が異なっても、サイトプランニングをしっかりとやり、内部をカスタマイズすれば、多様な用途に利用可能である。

細木氏に会って、この考えをお伝えしたところ、氏は「土佐の役に立ち、それ



先行事例／ダイニング サーラ内観
郊外に位置するレストランだが、昼夜を問わず常に賑わいを見せている。全面ガラスのカーテンウォールの外壁。内部空間は木、竹に包まれている。床は杉板張、天井は真竹。

それぞれの地域の役に立つなら」ということで賛同を得られた。

しかし、細木氏の設計は固有のものであり、それを化するには、別の取り組みを必要とする。私は過去にOMソーラーやフォルクスハウスなど幾つかのシステムハウスを軌道に乗せた経験を持っているが、それらは建築家の設計術であって、システムとして整理し直し、学べば誰でもやれる仕組みにするには別の作業を必要とした。相棒の村田直子（MOON設計）に細木氏設計の建物を見て貰ったら、システム建築になる要素を持っており、何より若い層に受ける建物だという。町工ネットの面々も、この方法を一般化できないかという。

私は、高知の林業家である藤原富子さん（土佐の木の家づくり協議会）と相談し、彼女の奔走によって、高知県農商工連携基金事業を活用して、3年間に及ぶプロジェクト事業として作業に着手した。運営と事業のコア・メンバーに細木茂氏と藤原富子さん、そして私はプロモーションの役割を担うことになった。

大きな普及を促すもの

キャッチフレーズは「地域施設に木を！」に定めた。プロジェクトの名称は「土佐／仁淀川流域発・木のプロジェクト」とした。発足から1年を経過した。この間、5mスパンの実施例をベースにして「標準設計」化を進めた。

この最初の成果を情報発信すべく、

我々はニューズレター・1号にまとめた。本プロジェクトのポイントは何か？ 煎じ詰めれば、取り組みの容易さ、コストの低さ、惚れ惚れしてもらえるデザインの良さに尽きるだろう。

コストは普及の動力となる。我々は本体工事（躯体と内装）のコスト目標（原価）を、鉄骨建築に対抗できる3・3㎡当たり50万円に設定した。そこまで詰めないとパワーにならないと考えた。それが地域のムク材利用と、躯体の合理化構法の開発を促した。

しかし、ムク材は材質がマチマチである。昔、集成材メーカーのトップである銘建工業の中島浩一郎氏に聞いたところ、集成材より性能の高いスギはあるが、強度のバラつきが如何ともし難いと言われたことがある。「無等級材」などという言葉が罷り通る後進性を克服しなければ、ムク材に将来はないのではないか。

林業家の藤原富子さんは、主要構造材についてはE90以上、D20以下（芯部計測）を用い、ラベル表示することを表明された。土佐においても選別工程を必要とする。藤原さんはそれを「やらなければいけないこと」として手間を承知で買ってしまった。考えてみれば、野菜などは選別出荷が普通である。材価の低さを嘆く前に、山がやるべきことは山ほどある。

そして、他地域のレベル向上のために、土佐のノウハウを活かしてほしいと申し出られている。



小池 一三 こいけ いちそう

町の工務店ネット代表

●町の工務店ネット・住まいネット新聞

「びお」 <http://www.bionet.jp/>

「手の物語」 <http://tenomonogatari.jp/>

1946年京都市生まれ。パッシブソーラーの普及に寄与。その功績により、「愛・地球博」で「地球を愛する世界の100人」に選ばれる。(耐住宅建築 省エネルギー機構理事及びソーラー住宅推進協議会会長、国交省「木の家づくり」から林業再生を考える会) 委員として役割を果たす。【主な現職】町の工務店ネット代表/住まいネット新聞「びお」編集人/web 通販「手の物語」代表【主な著書・編集】『仕事の創造』(共著/岩波書店) / 『近くの山の木で家をつくる運動宣言』(文:起草/農文協) / 『木の家に住むことを勉強する本』(編集人/農文協) / 『リンゴのような家』(編集人/新建新聞社) ほか

6m超〜10mスパンの開発

今回のプロジェクトの最初の仕事は、先に述べたように、細木氏の事例をベースにした「標準設計」化をはかることだった。用途の多い5mスパンによる「活かせる木の箱」に仕上がった。

その詳細については、次号にて掲載するとして、残り2年間にやるべきこととして、6m超〜10mスパンの開発計画を紹介したい。

小径断面のムク材は、スパンを遠くに飛ばせない。しかし、太い梁を渡さなくとも、部材の節点をピン接合(自由に回転する支点)とし、三角形を基本にして

活かせる木の箱プロジェクトが発行するニュースレター・1号



ホームページ <http://project.ask21.jp/>

【ニュースレター登録のアドレス】

メール: project@ask21.jp

組んだトラス構造にすればスパンを遠くに飛ばすことが出来る。プロジェクトは、そのために独自の金物を開発することになった。

実現されれば、ムク材を用いた地域施設の使用は多様に広がるだろう。ムク材は、性能保持のための選別工程を行なったとしても、基本的に単価は低い。この有利性に加え6m超〜10mスパンの方法を低コストでやれたら、鉄骨やRC造に對抗できる。

残された強度の弱い材は内装に用いられ、用途は様々にある。要するに適切な所を貫徹することだ。

藤原さんの決意に奮ったのは、設計の

細木さんであり、構造設計者だった。材がルール化されれば、建築の可能性は広がる。キラリキラリと目が光るなかで、プロジェクトが取り組むべきテーマが明確になって行つた。

年6回、ニュースレターを出します。

この取り組みを、土佐だけのものにして、各地の工務店、設計事務所ノウハウとして活かされてこそ「地域施設に木を！」の流れを生むことができるのではないだろうか。

プロジェクトは、まだ緒についたばかりだが、日々進行している。それをニュースレターで発信し、情報を共有し、地域施設に木を！」の取り組みを共に進める仲間を募ることにした。

細木設計の具体は、建物を見なければ分からない。そこで、建物見学会を開き、それだけでもつたないののでスクールを開く計画を立てている。設計相談の時間を取り、各地の建築技術者とのジョイントなども視野に入れて進め、情報交換を図りたい。連携・提携は様々なカタチがあり得る。大切なのは流れを生むことだ。

この取り組みは、土佐の事業であるが、こうした取り組みを通じて、土佐側にもそれなりの見返りは期待できると見ている。ノウハウを伝えて損になることはない、というのは、これまでの私の経験が教えるところである。